

村山自社連立政権を打倒しよつ！

共産主義者同盟（全国委員会）

(1)

六月一九日、社会党の村山委員長を首班とする、自民党、社会党、新党さきがけ三党による連立政権が成立した。海部をかつき自民党分裂をさそることで多数派を狙った旧羽田連立与党は、自民党の一部を引きつけながらも多数に到らず、結局、発足後わずか二ヶ月で野に下ることとなった。

昨年の八月、自民党分裂と八党派連立政権の出発として全面化してきた二大保守政党制にむけた政党再編は、本年四月には細川連立政権が倒壊し、そして、社会党の離反による羽田少數連立政権の発足を経て、ついに、自社連立政権と社会党首相の登場という事態を迎えるに到了。

発足した村山政府は、法務、外相、通産、運輸、農水、防衛など、その重要閣僚ポストの大半を自民党が占めるものとなつた。それは、明らかに自民党を中心とする自社連合政権である。マスコミは一斉に「政策が違う野合政権」であるかの如くに叫び立てた。だが、自社連立政権は「野合」でもなんでもない。

社会党は、すでに、安保・自衛隊・原発・対韓政策など、抵抗

政党としての主要な政策のすべてを転換してきた。自社連立政

権の成立は、社会党が保守政党へと全面的に純化するによって、自民党と基本政策をめぐる対立政策をほとんど持たないところにまで変質してきた結果に他ならないのである。

(1)

発足した村山自社連立政権は、その基本路線・基本政策において、細川連立政権や羽田連立政権と何ら大きな相違を持たず、ブルジョアジーの利益を擁護し日本帝国主義の利益に立脚するブルジョアジー政権に他ならない。

社会党と新党さきがけが共同案として合意し自民党が受け入れた、「新しい連立政権の樹立に向けた合意事項（案）」は、昨年七月の連立政権に関する合意事項及び八党派覚え書きを継承発展させることを確認している。そもそも、この八党派の基本合意とは、細川連立政権がその出発時に、「自民党政治の基本政策の継承」を改めて確認したものであった。

村山政府の特徴は、唯一、小沢一羽田政府のタカ派的政治手法に対抗するハト派的政治手法の採用を押し出していることにある。「小沢の強権政治に反対する」とを一致点に、村山連立政権はできつてだけ「護憲リベラル」を自らの旗印として押

し出そうとしている。だが、その具体的な内容たるや、小沢一羽田政府の強引さに対し、「国連安保理常任理事国入りについて慎重に対処すること」、および、大型間接税・消費税大幅アップに向けて「本年中」に結論を出すと、羽田旧連立与党に比してその時期を引き延ばしているにすぎない。また、村山政府は、日米安保体制の堅持、朝鮮半島をめぐる日米韓体制の堅持、国連PKOへの積極的参与を誓い、その基本政策においてこれまでのブルジョアジーの政治をそつくりそのまま継承している。社会党の保守党としての完成によって可能となつた自社連立政権の登場とその政治は、労働者人民のなかに残存してきた社会党に対する幻想の最後の一炎をもはぎ取ることとなるを得ない。そして、それ故に、社会党からの労働者人民の広汎で最終的な離反は決定的かつ不可避である。発足した村山内閣への支持率の低さは、すでにそれを示して余りある。そして、これはまた、二大保守政党制の下でのわが国における階級闘争の基本構造が、すでに完全な姿で表れ出たことを意味している。

(II)

村山自社連立政権の登場によって、昨年の七月以降に全面化してきた二大保守政党制にむけた政党再編は、いよいよその本格的な第二幕に入った。自社連立政権の登場は、社会党も含めて既成議会政党がまるごと総保守化してしまったことを、労働者にとってもはや一片の幻想もなく示すものとなるとともに、社会党を含む与野党貫く総保守化が完成されたことを意味している。

村山連立政権の礎石たる自社「さきがけ」三党による先の合意事項には、「次期衆議院総選挙を新選挙制度の下で実施する」と明記された。村山自社連立政権は、自ら、これまでの細川や羽田などの連立政権と同様に、二大保守政党制にむけた更なる政党再編成へと向かう過渡的政権としての歴史的役割を自覚している。

この間、日本帝国主義ブルジョアジーは、激化する帝国主義間抗争の中で、アジアを自らの経済権益としてうち固めつつ、政治的・軍事的に制約のない国際帝国主義としての突出を計ってきた。制限のない軍事出動策動、核武装の潜在的条件の確立、国連安保理常任理事国化は、すべてこのためであった。さらに、生産拠点をアジアを中心とする海外に移転しながらアジア支配を強め、国内では、産業の空洞化を招き、相対的下層労働者を

構造的に再生産しつつこれを切り捨てていこうとしてきた。そして、国内における支配体制の転換を、二大保守政党制にむけた政党再編成として進めてきた。こうした國際帝国主義としての突出という日帝多国籍資本の利益を最も鋭く代弁してきたのが、小沢を先頭とする新生党であり、細川・羽田と続いた旧連立与党内の主勢力であった。そして、自社連立政権は、小沢らに対し、日本帝国主義ブルジョアジー＝多国籍資本の利益から切り捨てられていくとする現在の中小ブルジョアジーへの配慮を要求し、よりハト派的政治手法を要求しているにすぎないものである。

事態は、今後、萌芽的に表れたブルジョアジー内部の「タカ派とハト派」へと色分けされる政治的潮流へと、より流動し最編成されていかざるを得ず、社会党の保守党としての最後的完成を条件にして、現在の与野党すべてを貫ぬくより全面的な政党再編成にむけた第二幕へと向かうであろう。すでに羽田旧連立与党は「新・新党」の形成にむけた統一会派の発足を策動している。二大保守政党制に向けた与野党貫く政党再編成は、小選挙区制下での選挙をバネにしながら、自民党的最分裂と社会党の分裂と消滅を含めて一挙に加速する第一幕へと突入する。また、二大保守政党制を要求する先兵となってきた連合指導部は、民社・社会の与野党へのまたさき状態から脱却するために、今後の政党再編成の過程でこれまでにも増してその反人民的な役割を買ってでていくだろう。

(四)

二大保守政党制は、その基本政策において根本的相違のない二つの保守政党（保守勢力）でブルジョア議会を独占し、労働者人民の不満をそのいずれかに収斂していくことによつて、ブルジョアジーの階級支配の安定と国内外にわたる帝国主義政治を推進していくことを企むものである。だが、二大保守政党制の下では、他方においてブルジョア議会には決して収斂されるることのない広汎な労働者人民の反政府抵抗闘争を構造的に最生産する。そして、とうとう、社会党の保守党としての最後的完成と自社連立政権の登場によって、社会党に対する労働者人民の幻想は、最終的に断ち切られ打ち砕かれた。そして、二大保守政党制下における階級闘争の基本構造があらわとなってきた。そのことは、逆に、かつての抵抗政党としての社会党の本質的

な消滅によって、労働者大衆の中に自己の利益を本当に擁護する新たな政党を潜在的に要求する時代が、いよいよ本格的に始まつたことをも意味している。

先進的労働者は、二大保守政党制の下に収斂されることのない労働者大衆の反政府抵抗闘争の先頭に立ちきらねばならない。村山自社連立政権の打倒を掲げて、労働者大衆の抵抗闘争を独自に強めなければならない。村山政府の下で推進されていこうとしている日帝の侵略反革命政策と闘争し、村山政府のハト派的手法、すなわち人民を懷柔しながら推進されていこうとする反人民的政策を暴露し、労働者の抵抗闘争・政治闘争を全力で強めねばならない。

同時に、先進的労働者は、もはやいかなる意味でも、社会党に対する幻想の下に労働者人民をつなぎ止めてはならない。社会党内の「護憲派」は、この間、社会党の主体性を復活させるという目的で、自社連立政権の樹立を推進する役目を果たした。一方、デモクラツチは、旧連立与党側への復帰を望んだ。与野党貫く二大保守政党制にむけた政党再編の第二幕の過程で、社会党の分裂は不可避であり、その抵抗政党としての再生は不可能である。かつての抵抗政党としての社会党の最良の遺産を継承しようとする人々は、いよいよ保守社会党と訣別し、わが国の新たな階級闘争の発展に力を尽くすことが求められている。また、先進的労働者は、そのために奮闘しなければならない。

その道は、二大保守政党制の下で推進されていこうとする日本帝国主義の侵略反革命と対決し、アジア第三世界の反帝民族解放闘争に連帶する、わが国階級闘争（政治闘争）の新たな再建にある。そして、これを牽引することのできる労働者階級の利益に立脚する革命政党を強化し発展させていくことにある。また、このためにこそ、二大保守政党制の下で、抵抗政党として自己を押し出すとする日本共産党的犯罪性を暴きつつ、労働者階級の眞の革命政党を強化し発展させていくことが不可欠である。日本共産党は、日本帝国主義の侵略反革命の免罪、反帝民族解放闘争への敵対、帝国主義本国内における「城内和平」の要求、すなわち、帝国主義の超過利潤のおじぼれのみを要求する排外主義的な社会民主主義的政党へと変質しつつある。だからこそ我々は、先進的労働者がわが同盟に結集し、労働者階級の利益を国際的・国内的に擁護する革命党の発展と階級闘争の前進のために、ともにたたかうこと訴えるものである。